

—2023年11月19日第301回（25周年）山歩き 資料一

北鎌倉の景観を後世に伝える基金

なだ いなだ先生の思い

当基金機関誌『**北鎌倉の風**』から再録したものです

P.2 「ゆっくりと根気よく」

1999年 3月発行 創刊号 P.4,5

P.4 「少年時代の原風景」

2000年 11月発行 第2号 P.2,3

P.6 NPO 法人化記念シンポジウム 挨拶

2001年 11月発行 第3号 P.1~4

<なだ いなだ先生略歴>

- 1929 東京に生まれる
- 1953 慶應義塾大学医学部卒
フランスに留学
- 1956 同人誌「文芸首都」に参加。
医業に加え文学活動に入る
- 1962 国立久里浜病院に勤務
- 1990 北鎌倉に家を建てる
- 1998 「北鎌倉の景観を後世に伝える基金委員会」会長に就任。
第1回以後山歩きに度々参加
- 2001 NPO 法人初代理事長に就任
- 2005 理事長退任、顧問就任
- 2013 6/6 逝去

<当基金の歩み>

- 1998 基金創設の準備会発足
11/23 第1回 山歩き
- 2001 NPO 法人化
- 2004 鎌倉市が台峯保全を決定
- 2009 基金の1,354万円を市に寄付。
市政功労者として表彰される
- 2013 11/17 第181回山歩きを併せて「なださんを偲んで歩く会」の第1回とする。以後毎年11月に実施
- 2021 NPO法人は解散、任意団体へ。
残余約279万円は市あて寄付
- 2022 山崎・台峯緑地の全面開園

ゆつくりと根気よく

代表 なだいなだ

自転車に毛の生えたようなバイクで、ドイツの鎌倉に似た坂の多い古都を旅行していた時です。ぼくはまだ元気のいい青年でした。夕暮れ近く、城の廃墟に作られたユースホステルを探しました。そこで一晩を過ごそうと思つたからです。通行人の一人に尋ねると二百メートルほどある山の天辺を指さしてあそこだといいます。そればかりか、彼は私と並んで歩き出しました。ちょうど自分もそちらの方向に行くからというのです。私のバイクは悲しいかな、エンジンが小さくて、急坂を登るに十分な力がありません。荷物を積んだバイクをゆつくりと押し上げて歩くほかはありません。私は汗を搔きふうふういいました。道を教えてくれたドイツ人は気の毒そうな顔で、私を見つめて「大変だな。疲れただろう」といいました。「うん、かなり疲れた」「坂は急だぞ」彼はいい

ました。そんなことはいわれないでも分かつている。それより、後ろから荷台を押してくれないかなあ、と私は考えました。しかし彼は最後まで押してくれませんでした。そのかわり、

「急ぐな。急げば途中でへばつてしまふぞ。もつとゆつくり、そしてしつかりと」

彼はそういうて傍らを歩きながら、最後まで、力は貸しませんでした。くれたものは親切な助言だけでした。でもそれは旅を続ける上で実に役に立つ助言でした。いや、人生で仕事をやり始めるときには、いまでも役立つ助言です。私は今も、ついこの間のことのように思い出します。そして「もことゆつくり、そしてしつかりと」とつぶやくのです。

わたしたちが九八年の十一月に、縁を守るナショナル

トラストの運動を立上げてから、数ヶ月の日が過ぎました。まだ数ヶ月にしかならないのか、という気もします。その短い期間に、いろいろ忙しく行動してきたからでしょう。思いがけないほど多くの人から注目され、好意ある励ましをいただきました。

まつたくの素人集団、しかも決して若いとはいえないものたちが主体になった活動です。やり方がわからず、てんてこ舞いしてパニックになりかけたこともあります。そんな素人くさい運動にもかかわらず、これまで予想外の支持が得られたのは、みどりと景観を守ることが重要だという考えが、一般の人たちに、すでに浸透し感じられていました。鎌倉の緑が鎌倉市民だけのものではなく、たの地にすむ人たちの記憶の中にも残るお金では測れない財産だと考えられるようになってきたのでしょうか。

この小人数で始めた運動の最初の成功が、ほかの同じことを目的とした運動にも良い影響を与えていくのではないかと思いますし、そう自負していいのではないでしようか。しかし、これからが正念場です。大きい組織も悪くありませんが、小回りのきく小組織にも利点があ

ります。それを活かし、他人だよりにならざる、根気よく、いつまでも、自分たちの力を信じて続けていく必要があります。

わたしが例のドイツ人のことを思い出すのは、じぶんたちがそういう状況にあると感じるからでしょう。

わたしは、ゆっくりと根気よく、みなさんとこの運動を続けていく覚悟です。線香花火にならないように、「もっとゆっくりと、そしてしっかりと」です。

なだ いなだ氏

1929年生まれ。53年慶應大学医学部卒。精神科医として活躍する一方で、作家としても精力的に執筆活動を展開している。日本を代表するオピニオンリーダーの一人。'98年11月、北鎌倉の景観を後世に伝える基金会長に就任。主著に「アルコール問答」「権威と権力」「民族という名の宗教」(以上、岩波新書)「いじめを考える」(岩波ジュニア新書)「親子って何だろう」「クワルテット」(以上、ちくま文庫)。鎌倉市山ノ内在住。



少年時代の原風景

代表 なだ いなだ

ぼくは現在の東京都大田区の多摩川から程遠からぬところで生まれた。大正の大地震で罹災したぼくの両親が、その辺りに新築された借家に移り住んだからである。

ようやく意識し始めたぼくの目に入つたのは、家のまわりの長ねぎや麦や陸稻の畠。麦畠はかくれんぼをするには絶好の場所だった。ときどき黒穂病に罹つた麦を見つけると引っこ抜いてやつた。自分では「お百姓さんのお手伝い（今までいうボランティア）」をしたつもりであったが、大人はぼくを叱つた。引っこ抜いた穂は、折つて根元を軽く噛み潰し、麦笛を作つて吹いた。

畠の上には、夏になると銀ヤンマがむれをなして飛び、疲れるとねぎ畠の高い畠に下りて羽を休めていた。鬼ヤンマは群れにならず、ゆうゆうと低空を飛んだ。

農家の家の周りにはケヤキを中心とした森があり、寺は杉、神社は松の林に囲まれ、それに植木だめとよばれる、植木用の養殖林があちこちにあつた。つまりセミの宝庫があつたのだ。家庭のオニユリヤ山百合が咲くころになると、ぼくらが虫網を持つて待ち構えているとも知らず、アゲハなどの大型蝶が訪れた。ぼくの子どものころの最大の遊びは、虫取りと魚取りだった。ぼくは狩人としては名人級だったと自信している。虫を取るためには木登りもする。そのうち木登りが目的になり、ピーターパンのように、木の上に小さな小屋まで作つた。思い出しても、今では夢のようだ。

道路もほとんどが牛車や馬車のわだちが深く刻まれた泥道だった。わだちとわだちの間にはオオバコなどの草が残り、はたけのみどりの雑草の間では、さまざまなバッタやこおろぎやクツワムシなどが飛び跳ねていた。ウマオイムシを鳴き声からスイッチョと呼び、クツワムシを、ガチャガチャと呼んだが、この声のうるさかつたこと。

それはぼくだけにあつた世界ではなく、ぼくが生まれた70年前の日本にはどこにでもあり、東京23区の中でさえ、稀ではなかつたのだ。

戦後の経済開発にともなつて、そうした環境は、東京を中心にしてどんどん消えていった。それは都会の周辺だろう、農村には、昔のままの世界が残されているだろと考へていた。だが、農村でも消滅していくことは最近になつて知つた。ヘリコプターによる農薬の散布で、セミもトンボも、農村から姿を消していたのだ。ある長野県の農民が、東京に出て上野の公園でセミの声を聞いて、初めてああ今はセミの季節なんだと気がついた、こんなことでいいのだろうかと、新聞に投書したのを読んだからである。ぼくは、農村もだめかと絶望しかけた。

だが、二年前にこの緑地を歩いて、ぼくは目を見張つた。自分の幼年期の世界が眼前にあるではないか。まだここに残されている。荒れ果てていたがゆえに、いつそういとおしい気持ちになつたが、まぎれもない少年時代の風景だった。

それから何回ここまで歩いたろう。台峯の緑地を歩くと、ぼくのこころは、少年時代の世界に戻る。戻らるのはぼくの肉体だ。それが悲しい。

ぼくは歩きながらここをなんとか守りたいと思う。だが、それはここが天然記念物のように貴重だからではない。ここに見る風景なんて、かつては日本国中にありふれたものだつたのだ。ぼくの年齢のほとんどの日本人には、子供時代に共通な原風景といつてもよい。だが、今ではここだけになつてしまつた。ありふれたものが貴重だとは、なんという逆説かとぼくは思う。

ともかく、せつかく再会した幼少年時代の世界を、ぼくは再び失いたくない。だからそのため闘う。ここがなくなつたら、きっと根っこを抜かれた植物のような喪失感を感じるだろう。



市民と台峯を歩くなだ代表(なだいなだと)北鎌倉周辺をあるく

NPO法人化記念シンポジウム

自然との共生を語る

『緑萌ゆる台峰の森からの熱きメッセージ』

2001年6月3日
北鎌倉女子学園

司会（小田原茂夫理事） 今度、特定非営利活動（NPO）法人になりました。なだいなだ理事長から、一言あいさつさせていただきます。

自然を守らないと存在意義がない
など 皆さん、ようこそいらっしゃいました。な
だいなだと申します。私が代表をしておりまし
た「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」は一九九八年の一月に発足しまし
た。早いもので、発足してから間もなく三年にな
ります。私は鎌倉に移つて来て一〇年になるんで
すけれど、鎌倉という都市は歴史的に非常に思
い出に富んだ土地だと思います。日本の歴史のふる
さとともにいえるような特別な街の一つだと思うん
ですね。そして、日本の歴史の記憶に結びつい
たさまざまな建造物、土地、地名が残っています。

歴史にゆかりのある土地ということで、観光客をたくさん迎えているわけです。

しかし、鎌倉の場合は、京都などとは違つて、歴史的建造物や何かが裸で、そこに建つていても意味をなさないわけですね。街全体が海を前にし

て、山を背にした一種の城砦都市のようなどころだつたので、自然を守らないと鎌倉の存在意義がなくなってしまうということで漠然としていますが、トラストの名前に景観を入れました。景観も

大事な歴史的なものだ、歴史的な思い出とともに、景観も同時に守っていこう、という思いで私たち

が集まつたわけです。ただし、私は新参者です。

ちょっと名前を知られていたということで、そう

いう運動をしていた人たちから勧誘を受けて、代

表に祭り上げられてきたわけです。それを守る一

つの方法として、トラストという道を選択したわ

けです。昔はこういう問題が起ると、すぐに署

名運動をする、そして、問題になつている当事者

に署名で圧力をかけることが多かつたですね。少し甘い考えかもしれません、私たちはそういう

方法を探らず、お金を集めて問題の土地を買い取ることによつて、それを保存し、保護していくこということにしたわけです。トラストを立ち上げてから、いろいろな行事を催しました。その一つが「なだいなだと北鎌倉周辺をあるく」です。

地権者の後押しをしたい

歩いてその土地を見ることによつて、私たちはかなり考え方を改めるようになりました。景観といふと見たところというイメージが強いですね。そうすると見えるところの緑が守られていればそれでいいのではないかということになります。横須賀線で大船から、鎌倉に入つてくると初めに見えるのが、台峯の緑です。現実には見えるところの緑が守られていればいいのではないかということで、開発が進んできたわけですが、歩き始めてさ

まざまなことを知りました。台峯の奥にある自然が重要なものであり、そこは植物や動物などの宝庫であることが、分かってきたのです。同時に問題になつてきている土地の地権者の方々の気持ちも分かつてきました。その方々も実は心の底では、先祖代々譲られてきたその土地を、なんとか自然のまま残しておきたいという気持ちが、私たち以上にある。そして、地権者の方々は、固定資産税や相続税の重圧にあえぎ、非常に窮地に立たされていることも分かりました。ナショナル・トラストの手法を採用したことは間違つていないといますが、この運動をさらに進めて、地権者の人たちの後押しができるよう、日本の政治や税制を変えていかなければ、という気持ちがしてきたわけです。

買い取り資金は九九一円に

当初は仲良しの集まりみたいな任意団体でスタートしましたが、もつと永続的な組織にしようということで、NPO法人化を申請し、今年の五月に認可されました。現在までの私たちの活動を

要約しますと、現有資産は九一万五千円、買い取りのための準備金としての積み立て金が九九一万五千円あります。これは手を付けないお金です。会員数は現在個人が六二三名、法人が九件で、定例行事としては先ほど言いました「なだいなだ」と北鎌倉周辺をあるく」があります。台峯を中心に行きます。定期刊行物としては会報「北鎌倉だより」を年二回、機関誌「北鎌倉の風」というのを今までに二回発行しています。この第二号には台峯の植物と動物の写真——会員の方が、撮影されたものですが、載つております。それを見ると、なるほど、ここは大事な場所なんだということが分かります。こういう経過をたどつているのが私たちの会の現状です。これで私たちの会の現状についての報告を終わります。(拍手)

当基金の法人化を機に開催され、他の参加者は今井通子(医師、登山家)、竹内謙(鎌倉市長)、北島悟(当シンポジウムのコーディネータ兼司会、日本ナショナル・トラスト協会事務局長)の各氏、進行係は小田原茂夫理事でした。(肩書はいずれも当時)